NPO法人 奥矢作森林塾

調査団体名	NPO法人 奥矢作森林塾	団体代表者名	大島光利
設立年	2006年	対応してくれた人の名前	大島光利
団体URL	http://shinrinj.enat.jp/		
活動拠点	岐阜県恵那市串原地域、上矢作地域	調査員	眞木宏哉、浜口美穂
取材日	2013年12月8日	レポート作成者	浜口美穂

活動内容

2000年の恵南豪雨により、一夜にして3万7千㎥もの流木が矢作ダムに流れ込んだ。この災害の時、消防長だった大島さんは、山林が荒れていることを身をもって実感し、同志に呼びかけて定年退職後の2006年、同会を立ち上げて山林（里山）再生、水質保全、森林環境教育に取り組み始めた。
そのうちに空き家が増え始め、活用を考える中で、2008年に空き家調査・意向調査・データ分析を行い、2009年には、移住希望者や都市の人も巻き込みながら「古民家リフォーム塾」も始めた。
同団体のスタッフは5人だが、地元住民、移住者などに手伝ってもらいながら事業を進めている。
＜里山再生＞
●炭焼き・・・ダムに流れ込む流木を一度に大量に炭化する大型窯、伝統的な黒炭窯、ドラム缶を利用した研修窯3基があり、研修窯は地元小中学生の森林環境教育に使用。流木炭は、リフォームした家の床下調湿、土壌改良、水質改良に活用。木酢液からディーゼル燃料を抽出するほか、稲のイモチ病を抑える実験をしている。
●河川環境整備・・・河川に流木炭を入れて水質保全。地元住民・小中学生と、養殖したカワニナとホタルの幼虫を放流し、ホタルの里づくりを行う。河川の草刈りの応援、生きもの調査などによる環境教育も。
●「里山ぼらんてぃあ」・・・毎月第2日曜日に実施。古民家の手入れ、田んぼや畑仕事、山仕事など。
●公園環境整備・・・草刈り、剪定、間伐材でベンチづくりなど。
＜田舎と交流、移住につなげる取り組み＞
●古民家リフォーム塾・・・毎年、1泊2日で10回講座を実施。地元の大工さんが指導。現在は、移住者待機住宅として利用予定の旧串原駐在所をリフォーム中。
●里山体験イベント・・・どんど焼き、つるかご編み、ヘボをぼう、中山太鼓体験、縁会（独身男女ふれあい交流）、等々。
●田舎暮らし体験館「結の炭家（すみか）」・・・リフォーム塾で一番初めに再生した築130年の古民家。宿泊し、田舎暮らしの体験ができる場、地元の人と交流できる場にしている。
＜指定管理者として運営＞
●奥矢作レクリエーションセンター　●串原体験道場「創手味亭（つくってみてい）」　●串原郷土館
＜情報発信＞
●広報誌「山結人（やまゆいびと）」を発行・・・新聞折り込みや、串原地域では市の広報紙と一緒に全戸配布し、地域に会の活動を発信している。

キャッチフレーズ

みんなでやろまいか

会のモットー（何を大切にしているか）

地域を訪れる人、移住者、地元の人、みんなで一緒に地域をつくっていこう。

設立から現在に至るまで変化したこと

流木が活動の原点で、設立当初はやらざるを得なかった。今は楽しみながらやっていこうと変わってきた。慌てることはない。頑張りすぎると続かない。

連携している団体・専門家・自治体など

地域組織、串原林業、立教大学・野中健一教授、岐阜県立森林文化アカデミー、東京大学・蔵治光一郎准教授、矢森協など多数。また、恵那市のNPO連絡協議会をつくる動きもある。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動（例：小仕事づくり、山村・森林資源活用など）

●空き家ゼロを目指す移住促進活動
空き家調査から始まり、意向調査をしてデータ分析。空き家のオーナーに傷み具合などを連絡。古民家リフォーム塾では、地元の大工さんの指導の下、田舎暮らしに興味がある人、移住希望者などが集まり作業を行う。完成したら、地元の人を交えて交流会。その他、移住のための山水の引き方研修、野菜の育て方研修、チェーンソーの研修などを1泊2日で年3回ほど行っている。その他、空き家の相続の書類を揃える手伝い、高齢者施設入所者の家の管理、移住者の相談にも乗る。リフォームには6～8カ月間かかるが、この間を、移住者と生活を共にして串原地域を理解してもらう期間としている。
大島さんいわく、「移住希望者にメリットは説明しない。メリットは全国一律どこも同じ。だからデメリットしか説明しない。全部ありのまま見せる」。移住者は、地域の自治会に入ることが前提。住民会議のどこかの委員会に所属し、すぐに地域の人と一緒にイベント・祭りの実行委員になる。移住した人は「串原の人」という扱いを受け、それは「受け入れてもらえたという安心感につながる」。
この6年間で空き家を10棟リフォームし、27人が移住。移住者は千葉から大阪まで広範囲。情報源は口コミ、HP、DM、取材記事など。さらに移住希望者は14名いて、空き家を待っている状態。一日でも早く移住希望者が古民家で暮らせるよう努力している。
2013年10月、過疎地域自立活性化優良事例表彰で、全国過疎地域自立促進連盟会長賞を受賞。

現在直面している課題

NPOの後継者づくり。

今後やってみたいこと

若者がもっと移住してほしい（現在は、移住者の4割くらい）。そして、ここで起業し、地元の人を雇ってくれるのが望み。そのバックアップはしていきたい。また、農地も余っているので使ってほしい。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞里山ぼらんてぃあに参加していた移住者、移住予定者に質問。「移住を決めた要因は？」
＜答え＞
●犬山市から3年間通い、やっと空き家を手に入れた人（来月からリフォーム開始）・・・若い頃から田舎暮らしに興味があった。3年前にネットで見つけて、空き家ツアーに参加。気に入ったのは「人」。ここにはしっかりしたNPOの活動がある。物件だけではやっていけない。助けたり、助けられたり。困ったら訪ねる場所があることが大事。

●第1期リフォーム塾生で住居を新築して移住した人・・・ここには実力者がいない。みんな同じようなレベルで生活し、「とりもって」（協力して）きた地域。それがいい。

●NPO事務局・端さん・・・2013年2月に森林整備講習会に参加。4月に移住を決めた。都市から近いわりに自然が濃い。駅も信号もコンビニもないけれどそれも魅力。ここに集う人たちが楽しそう。地域の皆さんがよそ者をよそ者にする人たちではない。

その他、伝えたいこと

●大島さんに、「他の閉鎖的な地域ではこのような活動はできない？」と聞いたところ、「できる」と即答。ポイントは、「地域の人に何をやっているか、まめに情報発信すること」。

●行政主導ではダメ。民間がやっていって行政がバックアップする体制がいい。

写真

「里山ぼらんてぃあ」の12月の活動場所は、リフォームした築150年以上の古民家の庭木の手入れ。
お昼は、この家に移住した人が手打ちそばをごちそうしてくれた。みんなで和気あいあいと話が弾む。

第1期リフォーム塾で再生した「結の炭家」。交流施設として活用。リフォームのコンセプトは、昔の形に戻すこと。新建材は全部取り払い、柱だけにしてから始める。ここ松本部落では、5軒の空き家が埋まり、空き家ゼロの地域になった。